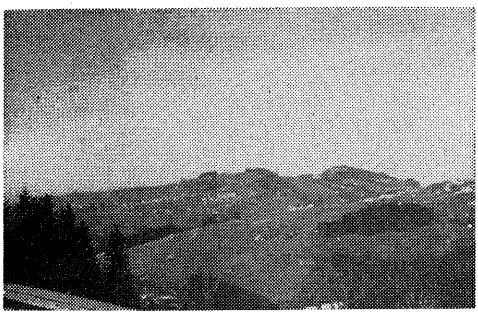
（ヨーロッパの旅）

スイス（トローゲン）にて

平井信義



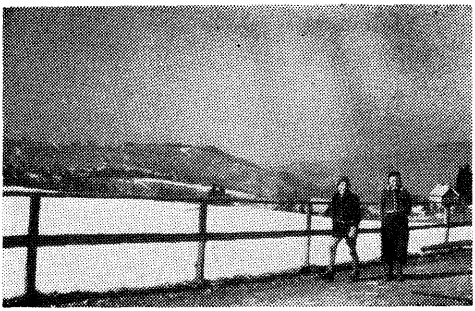
ペスタロッチが貧しい子どもの肩に手をかけているあの有名な銅像は、チューリッヒ市内にある。駅から湖までまっすぐ走っている街路に沿って右側に、小じんまりした広場があるが、木立に囲まれたその広場のまん中に、銅像が立っているのである。

ヨーロッパの国々で、ペスタロッチの名前ほど、子どもに関係ある施設や組織につけられているものはないだろう。私が留学していたケルン大学の問題児の病棟も、「ペスタロッチ病棟」と呼ばれている。西ドイツの保育協会も、「ペスタロッチ・フレーベル協会」という名前がついている。方々にペスタロッチの子どもの村というのがある。スイスのトローゲンにも、同じ名前の「子どもの村」があった。私がその子どもの村を訪れたのは、山々には雪が輝き、丘々にはむら雪が残っている三月の半ばである。

実は、この「子どもの村」については、ある場所さえも知らなかった。ベルンの児童相談所を見学した時、ヘバーリン女史から「是非いってごらんなさい」とすすめられたのが、トローゲン行きを決心させたのである。短い旅の日程であったが、私はチューリッヒか

ら汽車と電車で東へ二時間も走った。スイスでは東の端、オーストリアとドイツの国境に近い丘にトローゲンがある。ツェルマットいう町で汽車を降り軽便電車に乗りかえたのが午後三時。右下遙かにボーデン湖の眺めがひらけ煙立つように湖面や湖岸の町々がかすんでいた。鉄道の路線に沿うように人家が立並び私の視野を遮ったが、その家並みは三列か四列で、それもしばしば広い牧場の柵に隔てられて、再び広々としたボーデン湖の眺めを楽しむことが出来た。

小一時間も登りつめて、終点にトローゲンがある。ホテルとは名ばかりの肉屋の三階に荷物をおろしたのが、四時近くであったろうか。そのままの足で、ホテルの階段をきしませながら戸外に出ると、直ちに「子どもの村」に向った。

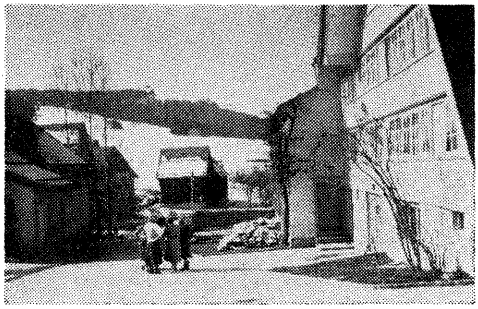


くねくねと曲った村の坂道を四・五分も登るともう村はずれである。太い楡や楓の並木道が続く。それを抜けると、急に視界が開けた。向いの丘にはうねうねとコンクリートの道が狭い、丘から丘へと続いていく。その丘の左の裾は、そのまま西ドイツへ、奥へ幾重にも丘をまたいで行けばチロルの森へいくはずである……。私は薄日の射している空を仰いで深呼吸をしてから、柵にもたれた。その脇を、顔の皺の刻みの濃い老人がゆっくりゆっくり歩いていく。二・三人の学童が老人を追い越していった。

私は彼らの後姿を目で追いながら、これからさらに登っていく丘の上を眺めた。淡い日射しの西日を背に受けて、いくつかの建物が立っている。嶮しい屋根の勾配が、流れていく薄墨色の雲の中にくっきりと見える。そこに通ずる道の両側には、牧場を仕切る木の柵が右に折れ左に折れして続き、早足の子どもたちと、背を丸くして後を追う老人の姿が、次第に小さく登っていくのが見えた。

さっと冷たい風が吹き下してくる。雲が寄せて日射しを遮ぎる。たちまち雲が散って、日射しが明るむ。——そんな天候の夕方であった。何か嶮しさを感じさせるような暮間近かであった。

私は外套の襟を立てながら、柵に従って丘を登り始め



た。登っていく程に丘がひらけて、下から見た家々の他に、点々と幾つかの家が現れてきた。しかし、さきほどの老人や子どもたちは、どこに消えたのだろうか。全く人影のない丘の上に到達したときには、最後の日射しが、家々のガラス窓に当って、羽ばたくように赤々と揺れていた。

私は一軒の家の戸口に立つと、奥まった廊下から太った女の人の影が振向くと、エプロンで手をふきながら近寄って来た。

「何か御用ですか？」とドイツ語で尋ねたので、私は来意を述べた。「次の建物に事務所があって、そこに村長のビル氏がいますから、訪ねて下さい」といった。村長というのは「子どもの村」の村長である。

相憎、ビル氏は不在で、明日は必ず来るから、十時に来てほしいということであった。しかし、「もし宜しければ、ご案内しましょう」と、男の事務員の人は、若い女の人を呼んだ。ブロンドの髪の、目のくるくるした可愛らしい女の人が、出て来て、私の先に立って事務所を出た。「ここには百八十人の子どもがいます。八ヵ国から来ているのです」と、彼女は歩きながら説明した。「一軒一軒がイタリー寮、イギリス寮、ギリシャ寮と、その国々の子どもを収容するようになっているのです。そして、寮の先生は、それぞれの国から選ばれた方が、一家で来て、子どもたちの教育に当っています」、――静かな声は、私の耳にしみ込んで来る。

「子どもは、どのような子どもなのですか？」

「各国に選衡する組織があって、そこで両親のない子どもとか、不幸な子どもを選んで、ここへ送って来るのです」

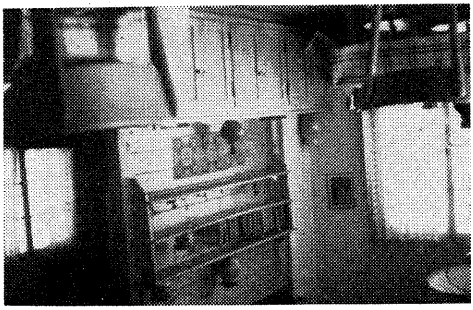
「どこでお金を出しているのですか？」

「スイスです。『子どもの村』の組織委員会です」

そう言いながら彼女は、イタリア寮の戸口をあけた。中には子どもがひとりもいなかった。「何か作業に出かけているのでしょう」と弁解するように言いながら、部屋から部屋へとドアを開いては見せてくれた。木造の家であるから、立派とは言えないが、きれいに整頓されていた。一と部屋に二つ宛ベッドがおいてある。模様のベッ

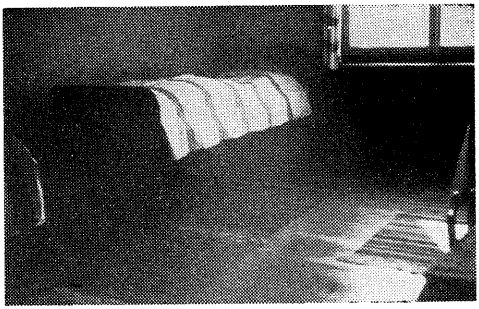
ドカバーがかけてあり、枕元の机の上には、黄色い花が活けてあった。図書室もある。ピアノのおいてある部屋もある。

「こうした部屋の作りは、出来るだけ家庭的な雰囲気を出すように努力されているのですよ」と自慢そういった。いずれにしても、我が国の養護施設とは、何という開きがあるのだろう。こうした施設を見るにつけ、ヨーロッパの町々を歩くにつけ、ドイツでの生活を重ねるにつけ、いつも泌々思うことは、日本の貧しさであった。すでに暗くなり始めている坂道を下りながら、再び日本の貧困を思い返した。



肉屋の三階の夜は、電灯も薄暗かったので、木の細根のように巻いた土地の煙草を一本ふかすと、まだ八時半というのに床についてしまった。ビールの酔も手伝って、すぐ寝付くには寝付いたが、十時半頃に目がさめると頭が冴え返り、なかなか寝付かれなくなってしまった。十五分ごとに時を告げる教会の鐘の音を心待ちにしながら、自分の将来を日本の子どものためのどのような仕事に献げるのが、自分の能力をもっとも生かすことになるのであろうかと考えた。研究にたずさわりながらも、お前の研究がどのように子どもたちのために役立っているのか」という声が、いつも背後から聞えてきて、不安に思う日の多かったことを思い出した。ことに、養護施設を見学したり、そこに遊ぶ子どもたちを眺めていると、きまって蘇ってくる思いであった。友人の医者たちが、子どもの脊骨に針をさしたり、注射をしたりして研究の業績を挙げているのに、心理の友人たちが、子どもの実験を重ねているのに、私自身にはそういう営みを持ちながらも、いつも不安に感ずることであった。そんなことを考えながら、ついに二時半の鐘の音をきいた。

翌日は、からりと晴れ渡っていた。ビル氏は私の訪問を待っていてくれた。「日本からここに来た人は、貴方で二人目ではないでしょうか」——訪問帳をめくりながら、二年ほど前に小学校の女の先生だかがちょっと立寄られたとビル氏はつけ加えていった。「貴方のように、泊りがけで見に来るかたはいませんよ。」といってから、私の仕事などにつ



いて質問した。

私がトローゲンまでやって来たいきさつを聞き終えてから、幾冊かのプリントも渡しながら「子どもの村」の大略を話してくれた。

「昨日も見せていただき、本当に羨しくなりました」と私が言うと、

「いや実は、なかなか難しい問題を背負ってしまっているのです。ここでの教育のねらいは、それぞれの国の子どもたちに愛国心を養うとともに、国際人としてお互に協力し合う気持を養おうというのです。ところがこうした理想はなかなか実現されない。それには、一つは先生の問題があるのです。それぞれの国で選ばれた先生ですが、つい自国の子どものことだけに熱中するのですね。国際人として協力する気持を養う点ではなかなか難しい。また、ホスピタリスムス（施設病）の危険です。従来、独り者の先生が来ていましたが、夫婦で一しょに来てもらって、夫婦で住み込んでもらうようになってから、非常によくなりました。ただ、先生に子どもがあると、孤児たちが嫉妬心を起すこともあったりして、何もかもうまくはいきませんね。それよりも、今一番困っている問題は、国際理解をどのような形でおこなうかということです。実は、いま、ギリシャの子どもとイギリスの子どもが対立している。同じ教室内で歴史の教育をおこなっているのですが、ギリシャの子どもは、イギリスの植民地が独立しつつあるのは当然で、イギリス帝国の今日の繁栄は、それら植民地からの搾取によって達成したというのです。ところがイギリスの子どもは、イギリスが植民地から各種の資材を手に入れたのは認めるが、その代りに近代文明を与え、植民地の国々の人々の目をさましたのだと言って譲らないのです。貴方なら、これをどのようにして理解・調和させるでしょうか？」

私は返答に困った。わが国の教育の中ではほとんど問題にならないことだったからである。

「ここで養育された子どもは、成人するとそれぞれの国に帰って、福祉関係の仕事で指導的立場に立って、国際間の友交と平和を呼びかけてもらいたいと願っているのですが……」

ビル氏は、なん度もこの点を強張した。ヨーロッパという広くもない大陸に数多の国々がしのぎを削っている。国境線は戦争のある度に動いている。その実感をそれぞれの肉体の中に持っている子どもたちが平和の願いをどのように実現するかには、日本のように島国では想像できないほどむずかしい問題である。我が国のおとなの「平和論争」は、その点でただ夢を論じ合っているようなものではなかろうか。幼い時から、正しい国際理解を養い、真の平和を願う人間に育てるには、全世界の国々の教育がどのような方法を見出すべきであろうか。私は考えのまとまらぬままに、ビル氏が招いてくれた昼食の食卓に席を移した。

× × ×